



アリス・J・スタークウェザー(左)

はじめに

創設期の同志社女学校は、別名京都ホーム、京都の「女学校」のほかに「ミス・スタークウェザーの学校」とも呼ばれていた。それは、アメリカン・ボードおよびウーマンズ・ボードの通信の中であつたが、同志社女学校とそれ程深い関わりのあつたスタークウェザーとは、どんな人物であつたのかを、彼女を派遣したウーマンズ・ボードとの関係を通して、また、実際に彼女が立ち向かわねばならなかつた問題との格闘を通して、探してみたい。

同志社人物誌 (74)

アリス・J・スタークウェザー

(同志社女学校初代婦人宣教師)

坂 本 清 音

(女子大学教授)

一、スタークウェザーの出自

カールトン・リー・スタークウェザー著『スタークウェザー家系図』によると、彼女の祖先は一六四〇年頃、イギリスのマン島からニューイングランドに初代入植者として移住して来たピュリタンであつた。最初にアメリカに渡つたロバート・スタークウェザーはウエールズかスコットランド生れと考えられているが、スタークウェザーという名前はイギリスにいた時からの名前か、それとも、当時の多くの人がしたように、政治的・宗教的理由から新しくつけた

名前なのか疑問であるを書いてある。著者はもし後者だとすれば、スターク(荒涼とした)ウェザー(天候)という命名は、当時の状況の変化を意味するものとして十分考えられる名前であると言う。

父はジョージ・スタークウェザー、母はメリー・ウェイト・スタークウェザーで、姉二人兄二人の五人兄妹の末っ子で、ただ一人独身であつた。彼女たち兄妹は第一代から数えて六世代目に当たるが、彼女のミドルネーム、ジャネットは、初代ロバートの妻の名前である。

生まれたのは、一八四九年八月三日、コネクティカット州ハートフォードで、「アメリカン・ボード海外派遣宣教師略歴」によると、一八六五年四月信仰告白をして同地の第一会衆派教会員となり、ハートフォード・フイメール・セミナリーで教育を受けたのち、しばらくイリノイ州エルジンで教師をしていたことが分っている。出身校のハートフォード・フイメール・セミナリーはアメリカで最も古いセミナリーの一つで、アメリカ女子教育の先駆キャサリン・ビーチャーが創設した学校である。

二、ウーマンズ・ボードに支えられて

婦人宣教師の海外での活動を考察する場合、必ず視野に入れておかねばならないのが、本国で物心両面から彼女たちの活動を支援した婦人伝道局の存在である。

スタークウェザーの場合も、名目上はアメリカン・ボードからの派遣であるが、ほとんどの婦人宣教師がそうであったように、実質上彼女の派遣を決め、仕度金を準備し渡航費を支払い、日本での活動を支援した（給料は言うまでもなく、彼女が関わるプロジェクト^{プロジェクト}同志社女学校^{同志社女学校}に要する資金^{資金}）のは、婦人伝道局であった。

南北戦争後、海外に婦人宣教師を送り出すことを第一目的とした婦人伝道局が、教派別海外伝道局と運動して相次いで形成されたのであるが、その中で最も古いのが、アメリカン・ボードとペアの関係にあるウーマンズ・ボード（一八六八年創立）であった。やがて、東部・中部・西部に分かれ、ボストンに本部のあるウーマンズ・ボード（WBM）、シカゴに本部のある中部婦人伝道局（WBM）、サンフランシスコに本部のある太平洋婦人伝道局（WBM）と三

つに分かれて活動した。

一八六九年、アメリカン・ボードが他教派よりも一〇年遅れて日本伝道を開始し、グリーン、デビス宣教師らによって神戸を中心とする伝道が本格化し始める一八七三年頃から、ウーマンズ・ボードも日本に婦人宣教師の派遣という形で活動に参加するようになった。

このウーマンズ・ボードの機関誌『女性のための生命と光』一八七六年五月号に「私たちの日本のホーム」という題で、京都の「女学校」の記事が載せられ、この学校の用地と校舎建築のために、現在行なっているアメリカ独立百周年記念募金を当てようとの提案がなされた。その時から、京都ホームとウーマンズ・ボードの直接の関わりが始まった。

この募金があったからこそ、宣教師全員が必ずしも賛成しなかった京都ホームの設立が可能になったのであるし、その後一度々訪れる女学校存亡の危機に際し、この募金がアメリカの婦人たちによって日本の女性の教育のためにと聖別され集められた資金であるとの事実が、スタークウェザーたちを強く支える論拠となったのである。

ウーマンズ・ボードの組織力、継続して資金を集める実に緻密な努力があったからこそ、「スタークウェザーの学校」が存立し、存続していったのである。

三、クリスチャン・ホーム実現の夢

スタークウェザーが来日したのは、一八七六年四月七日、京都入りは四月一〇日であった。京都ホーム創設に最も積極的に行動したJ・D・デビス宣教師の呼びかけに応じて、京都ホームで働くために来た最初の婦人宣教師であった。アメリカン・ボード全体としてみると、独身婦人宣教師としては九番目の来日となる。

本来は、出身地の関係上、中部婦人伝道局派遣になる筈であったが、出国前に急遽太平洋婦人伝道局派遣第一号の宣教師となった。

サンフランシスコのストーン博士の教会で行なわれた歓送会の席上、スタークウェザーの語った信仰体験、海外伝道を志すようになった神の導きを聞いて一同深く感動し、彼女こそ、この団体から神に捧げる初穂として送り出すにふさわしい女性であると確信したこと、彼女は「私ではなく、私

の中のキリストが」という思いを基調にしている人であることなどが、『女性のための生命と光』一八七九年七月号に紹介されている。また、シカゴのグリーン宣教師友人宅で、澤山保羅に逢ったことも、日本に対する関心を強めることになったと言う。(一八七八・二・一六クラーク宛)

京都での落着き先は、京都御苑内の元柳原前光邸であった。ここには、デビス一家とデビス夫人の姉であるドーン宣教師夫人が既に住んでいたが、五〇室以上ある大きな公家屋敷であったので、スタークウェザーが住み、ここで女学校を始める部屋の余裕は十分にあった。デビスによると(『同志社百年史』資料編二、一七一頁)、邸の奥の方で美しい庭に面した最も大きく最も良い部屋を三、四室使って授業を開始したとのことである。

開校を報じるスタークウェザーの書簡(二八七六年一月五日ボロック宛)には、神戸などの開港地と違って封建色の濃い京都京都で、果して生徒が集まるのかという不安と、僅か数名であったが、入学して来た生徒があったことが報告されている。そして、その半数以上が大変不遇な境遇の女

子であったことに對する憐れみ、この女生徒たちの運命を少しでも明るく変えて行こうとする熱意が語られている。その後の手紙の中でも、一人一人の生徒の名を挙げ、学校に来るまでの経歴を語り、ホームに來てからどんなに成長しているかの報告が手紙の大部分を占めている。教師ならば当然のことかも知れないが、起居を共にしながらキリスト教の感化を与えて行くというフイメール・セミナリー方式の学校を一日も早く日本で根付かせ、真正のクリスチャン女性を一人でも多く世に送り出したいと念願していることがよく分る。

彼女にとって、京都ホームは「キリスト教に對する関心と呼び起し気品ある女性を育てる記念碑であり。日本の最も暗い一隅を照らす燈台となるべく神意をもつて建てられた」(二八八二・一・七クラーク宛 学校であったのである)。

四、夢の挫折・傷心の帰国

——創設期京都ホームのつまずき——

本国で祈りと献金で支えてくれているウーマンズ・ボードのメンバーの期待を背に、スタークウェザーは早速夢の実現のために行動を開始した。

宣教師文書の中に収められている彼女の來日後最初の手紙は、女学校の開校を知らせる一八七六年一月五日付のものであったが、今回『女性のための生命と光』の創刊号から目を通すことができ、これより半年前、來日一ヶ月後の学校の様子が判明した。その中に「私はすでに新島氏を教師として確保し、五月二日から毎日授業を始めました」との一文があった。(傍点坂本)

最も早い時期から京都ホームに関係し、まさに京都ホームの生みの親とも言えるデビスが「女学校明治一八年事件」が起るまでの歳月を振り返って、「入洛以來一〇年間の様々な困難を体験したが、この女学校の問題は他の全ての困難を全部集めたもの以上であった」(二八八五・七・六クラーク宛)と述懐し、その発端が、実はスタークウェザーが日本に上陸して数週間もたない内に、日本人のやり方や偏見に精通しないで、彼女が下したいくつかの決断にあったこと、しかし、これは当然のことであり、誰か特定の人にその責めを負わすことはできない、と繰返し説明している問題発言の一つである。

彼女にとって、京都の女学校は「スター

クウェザーの学校」であり、自ら経営の責任を担うべき学校の筈だったから、自然にこのような表現になったのであろう。しかし、一方には、同志社社長新島襄が「同志社雇入米国教師デビス厄介婦人アレスジェーストークウェズル」を「弊社分校女紅場へ雇入教授可仕候」（『同志社百年史』資料編一、三一〇頁）との認識がある。

一口で言えば、京都ホームの主導権をアメリカン・ボードの側が持つべきか、日本人側（新島夫妻を代表とする）が持つべきかをめぐっての軋轢ということになるが、この問題を複雑にしているいくつかの層があるように思える。第一は、最も前面に押し出して考察し得る根拠、同志社女学校を存続せしめているのは、ウーマンズ・ボードから送られて来る資金・人材なのであり、アメリカン・ボードが主導権を持つのは当然という考えと、法律上、明記されている責任者は同志社社長新島襄であり、また事実、宣教師雇入れの許可を得るための新島の奔走労苦を思うとき、開港地でなく内陸部に学校を設立するには、日本人側の主導力は不可欠という考え方との衝突である。

第二は、ラーネッド宣教師が「この国で

は、新島でさえ、女性が校長になるという考えになじめないのです」（一八八四・七・一クランク宛）と表現した日本の文化の風土と、女性であっても十分に経営者として発言し学校の責任者であることのできた一九世紀アメリカ市民社会の中で女性の地位との差による相互不理解、異文化摩擦の問題である。宣教師として海外で奉仕しようとする女性たちは、もちろん信仰を基盤にした強い使命感に動かされてのことであるが、社会的に評価される形で活躍をしたいとの上昇指向も十分に持っていたと考えられている。

しかし、京都ホームの問題を一層難しく不透明にしたのは、第三の原因、山本佐久・新島八重母子とスタークウェザーとの対立であった。「アメリカに一〇年いてキリスト教主義大学がどんなものであるかを熟知していた新島氏のいた男学校にはこの種のトラブルは皆無」（一八八五・七・六デビスよりクランク宛）であったのだが、「大筋において優れた婦人であるが、京都ホームでは役に立たないばかりでなく彼女の影響力が女教師に対して不利に作用し不平分子を煽り立てる結果にしまった」と評される

新島八重と「スタークウェザーに判断力と経営上のタクトが欠けていたこと、彼女が熱心に献身的に働くことに対しては誰も賞讃を惜しまないが……もうとうまくやれば味方につけられる人をも敵にまわしてしまふ」（一八八四・七・一〇ラーネッドよりクランク宛）とされる彼女自身の器量の小ささに起因する二人の間の確執であった。その上、八重と佐久母子の結末は非常に固く、スタークウェザーにとつて、この二人の存在は、京都ホームを運営して行く上で、彼女の前に立ちはだかる大きな壁と感じられた。

来日して間もなく、デビス夫人と自分がどれ程、佐久・八重母子だけでなく、姪の二人（山本峯と久枝）に期待し、頼りにしていたかを述懐しつつも、一八八〇年頃から次第に二人に対する非難を本部あて書き綴るようになる。具体的には、八重母子が「女学校内の出来事は出来るだけ外国人教師には知らしめない」との不文律を作り、宣教師から生徒を遠ざけ、宣教師の感化が生徒に及ばないよう操作することに對する憤りである。

「その結果、始めの内はほとんど全ての生

徒たちが、私たちの教えに素直に耳を傾けているのに、何かの決定的合図が与えられたときから、私たちに對する信頼を失い、何とも気鬱な雰囲気があるホームの中に漂い始めるのです。やがて用事があつて私たちのところに相談に来た生徒が必ず突き止められ、次第に他所他所しくされるようになり、要するに私たち教師の許に訪ねて来る生徒も私たちも共に『罪人扱い』とまではいかなくても『間違いを犯している』とみなされ、そのように扱われるのです。そうになると、私たち宣教師が何を言おうが何をしようが、その影響力は著しく弱められるのです」(一八八二・二・五クランク宛)

来日当初「自分が今、どんなに辛抱強く、礼儀正しく、長い間苦しんで来た人々の間にいるかということは何度思うことでしょうか。その人たちにとっては、私たち西洋風のマナーはショッキングではないとしても、大変無礼でないかと恐れます。私が接近しようとしている人の言葉と好みを学ぶのはもちろんのこと、その足許に喜んで従順に座す知恵と必要を一日一日痛感します」(一八七八・二・一六クランク宛)と健気にも書き送っていたスタークウェザー

が、これまでの反動のように「非キリスト教文化圏の中で育てられた日本人の国民性、日本の社会を『妬み・嫉妬・猜疑心・競争心のはびこるところ』と弾じ、その中で育ち三〇歳と七〇歳になって回心した八重と佐久が身分やプライドのために、他の婦人なら喜んで受けるキリスト教の教化に心を閉ざしているのは憐れ」(一八八二・二・四クランク宛)とまで言うようになる。

アメリカ側の期待と責任を一身に担いつつ京都府知事慎村正直の妨害もあつて、同じ価値観・教育体験を共有し、支え合つてアメリカ型キリスト教主義寄宿学校の実践する筈の同僚もなかなか得られず、孤軍奮闘していたスタークウェザーが心身共に疲労困憊し、追いつめられて行く姿を垣間見るような気がする。

丸七年にわたる京都ホームでの生活に大きな挫折と屈辱を感じつつスタークウェザーは、矢張り病身のためしばらく本国で静養するラーネッド夫人に付き添つて、一八八三年五月五日帰国することになった。

その時点では、また戻つて来る可能性も考えられていたが、本国に着きコロラド州デンバーに転地して疲れた身体の療養を始

めた頃には、もう気力も衰え、一八八五年三月三十一日付でアメリカン・ボードの宣教師を辞任した。

五、生徒たちに遺したもの

『創設期の同志社』の中には、実際にスタークウェザーと京都ホームで起居を共にし、彼女の薫陶を受けた生徒たちの手記が集められている。

彼女が大変厳格・几帳面であつたこと、例えば、掃除の仕方でも「畳の敷き合せ、廊下の板の接ぎ合せ目、敷居の隅等をかんだしで足で堀らせ、積んでいる塵をとらせる程」(田中米、三三二頁)徹底していたこと、廊下や階段を音を立てて上ることは固く禁じられ、失敗すると何度もやり直しをさせるなど、女らしい立居振舞を身につけさせようとしていた(杉山恒、三三八頁)ことと並んで、「高い人格を持ってゐる親も及ばない慈愛の手で育ててくれ」、「真の教育家とは先生の如き人」(同、三三五頁)と慕われ敬まわれていたことが描かれている。

海老名みやば、先生の隣室に居た頃、「夜分寝る前の祈禱に、先生が何時も三〇分の長い時間を費され、寄宿舎に居りました生

徒の皆の名前を一々言われて、熱心に私共一人一人の為毎夜神に祈って下さった」(四二三頁)ことを証言している。スタークウェザーが一生懸命実践し根付かせようとしたキリスト教教育は、卒業後の生徒の心にしっかりと刻まれているのである。

スタークウェザーが急に帰国することになった原因は「同志社男子部の方の先生と意見の衝突があつて」(高畑菊、三四三頁)とか、「他の宣教師との意見衝突のため」(麻生ゑい、三九二頁)と説明されていたようであるが、「三〇年来親を想ふ日は無くとも先生を想は無い日はありません。同志社同窓会にも二三友人が集まっても、先づ口を衝いて出ずるは異口同音に先生の大恩であります」(杉山恒、三三五―六頁)。是非共、この気持を「手紙にし写真にしてお知らせしたい」ので、「先生の御住所探索に御力添へ下さいます事を」(同三三六頁)と依頼する文面も載せられている。

筆者の調べた限り、一九〇五年五六歳までコロラド州ボルダーで教師をしていた事は分っているが、以後のことは不明である。松浦政泰が卒業生たちにこの調査をした大正七年(一九一八)頃、彼女は六九歳にな

っている筈であるが、健在であつたのだろうか。

せめて、この教え子たちの気持が、晩年のスタークウェザーに伝えられていればと思わずにはいられない。



明治11年頃
スタークウェザーの学校の最初の生徒たち。(前列2人を除く)